

秘書課のオキテ

Karen & Syuji

石田 累

Rui Ishida

termity



エタニティ文庫

目次

秘書課のオキテ

5

書き下ろし番外編 「その翌日」

367

秘書課のオキテ

プロローグ 人生が変わる夜

「タカツカサ、こんなところに女の子が落ちている」

「社長、そんなものに直接お手を触れてはいけません」

……ん？

よくわからないけど、今、かなり腹が立つことを言われた気がするぞ。

胎児のように身を縮こまらせていた白鳥香恋は、ほんの少しだけ目を開けた。とたん夏草の匂いにむせそうになる。目をつむりながら息まで止めていたのだと、その時ようやく気がついた。

月光に照らし出された夏の夜の河川敷。急斜面の土手の半ばで、頭を下にして倒れている香恋の視界——その下側に、二人の男が現れた。

白いスーツと黒いスーツ。

華奢な方が白で、がっしりした方が黒。まるで漫才コンビみたいにわかりやすい。白い方が言った。

「どうやら、怪我をしているようだ」

すると、黒い方も口を開く。

「道路にブレイキ痕がひとつしかなかったたので、おそらく自損事故でしょう。ご覧ください。向こうに原付バイクが転がっている」

白の声は優しくてソフト。黒の声は低音でよく響く。

「いや待て、タカツカサ。その推理には穴がある。この子はまだ学生に見えるぞ」

「お言葉ですが、社長。高校生なら、原付バイクの免許くらい取れます。ただし服装からしてヤンキーと思われるので、無免許の可能性もありますでしょう。大方ハンドル操作を誤って、上の国道からこの土手にバイクごと転落した——そういったところではないでしょうか」

いや、すごいよ。この状況でそこまで正確かつ冷静に推理するあんたたちはすごい。でも普通、普通ですね。夜の河川敷で女の子が倒れてたら、しかもその近くに原チャリが転がってたら、普通——警察か救急車に通報しません？

それに私は、ヤンキーではない。

まあ今日は、いかにもそんな格好で外に出てしまったのだけだ。

こんな夜中に真っ白なベンツで河川敷に乗り上げてくるから、てっきり反社会的勢力の方たちだと勘違いして、つい気を失ったふりをしてしまった。とにかく、一刻も早く、

ここから連れ出してもらわないと。

「社長はお車にお戻りください。第一発見者は私ということで、警察に通報します」

「おい待て、タカツカサ、第一発見者は僕だろう」

「上の国道で、やたら車高しんこうの低い派手な車と何台もすれ違いましたよね。面倒事の臭いがします。だいたい、この娘の服装からして、まともな人間だとは思えない。関わり合いになるのはおやめください」

ちよっ……何それ。

黒い方の声だけど、なんて酷いことを言うんだろう。だいたい服装、服装と言いますが、このジャージは、れっきとした――

「学校指定ジャージです！」

思わず香恋は、倒れたまま反論していた。

しまった、と思ったが、立っていた男二人は驚いたように香恋を振り返る。

仕方なく、香恋は顔だけをその二人の方に向けた。

「い、色も紫だし、ダボツとしてるけど、やせてサイズが合わなくなったから、部屋着代わりに愛用してるだけです。今夜はいきなり呼び出されて、着替える間もなく家を出たから」

「……近頃の学生さんは、夜中にバイクで出かけるのかな」

そう言った白い方が、土手を上がってゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。

「それは、まあ、これにはわけが」

彼は香恋の頭の近くで足を止め、かがみこんだ。香恋はぎよっとして、身をすくめる。え、ちよっと、何、この人。なんでこんなに私に近づく――え、えええっ。

多分夜目にもそれとわかるほど、香恋は赤くなっていた。白い方が、息もかかるほどの近さに顔を寄せてきたからだ。

このシチュエーション、この前読んだロマンス小説と同じだ。悪党に追われ、森で迷子になって眠ってしまった王女。通りがかりの王子が王女を見つけ、あまりの美しさに思わず……

もちろん小説のようにキスはされなかったが、香恋は思わず見とれてしまった。

こんな綺麗な男の人、初めて見た。白い肌、長い睫毛まつげに縁取られた褐色かっしよくの瞳。上品な唇と、ウェーブのかかった柔らかな髪。まるでロマンス小説から抜け出てきた王子様みたいだ。

香恋の理想のタイプは、アンニュイな詩人のような、雰囲気がある美形。幼稚園からの親友、前田藍にすら「国産じゃ無理でしょ」と言われたその理想を、体現している日本人がいた。しかも、今、目の前に。

その時、土手の上から大きなだみ声が聞こえた。

「おい、こんなところにブレイキの痕があるぞ」
 「あのガキ、土手から落ちたんじゃねえか？」
 しまった。見つかった。

「お友達かい？」
 「なわけないです。すみません。かくまってください。私はいないと行ってください」
 土手の上の方に顔を向けると、数台の車のヘッドライトが見える。本当に、まずい。
 「ちよっとトラブって、その、……追いかけてるんです、私」
 香恋はそう言うなり、立ち上がって逃げようとした。が、怪我をしたのか足はびくとも動かない。

白の王子がすつくと立ち上がって、土手の下に立つ黒い人影を振り返った。

「タカツカサ、とにかくこのお嬢さんを車に乗せよう」

「警察に通報したほうがよろしいかと存じます」

「悠長に警察の到着を待っている暇はなさそうだよ。まだ開いている病院を探して、送ってあげよう」

「この娘がどうしようもない悪党で、上にいる連中が被害者だという可能性も捨て切れませんよ」

何、この人。

黙って聞いていれば、ヤンキーとか悪党とか、ちよつと言うこと酷すぎじゃない？

香恋の位置からは、黒い方の男の顔までは見えない。背が高くて、肩幅が広いのがわかる程度だ。どうせ鬼瓦みたいな顔をした親父だろう。さながら佳麗な王子を守る爺といった役どころか。

「この子は、悪い子ではないよ」

白の王子がやんわりとした口調で言った。そして香恋を振り返ると、ふつと淡く微笑んだ。

「だって、いい匂いがするからね」

きゅん……

今、まさにそんな音が胸から聞こえたような気がする。

きゅんときた。やられた。今、完全に恋に落ちた。

「社長……いつも言っています、匂いなんかで人の善し悪しは判断できやしませんよ」

「ははは、ちなみにタカツカサの匂いの方が、僕は好きだよ」

楽しげな笑い声と共に、白の王子が不意に視界から消えた。その直後だった。いきなり背中と膝の裏に手が差し入れられ、あつと言う間もなく、香恋はふわりと抱え上げられた。

——えっ……

人生初のお姫様だっこ。

すごい。本当にロマンス小説の世界みたいだ。まさか、生まれて初めて巡り会った理想の人に、お姫様だっこまでしてもらうなんて。

「くそ、重い」

その声で香恋の夢想はたちまち吹き飛んだ。王子じゃなくて、黒い爺の方だった。ななことだろう。人生初のお姫様だっこの相手が、意地悪な爺だなんて。だいたいこの男、いつの間に土手を上がってきたんだろう。

しかも、いったんずり落ちた香恋を再び持ち上げる手の、デリカシーのなさといったら！

「ちよっと、一応女子高生なんで、気安くお尻とか触らないでくださいよ」

「はあ？」

香恋を睨むように見下ろした爺の顔は、予想に反して若かった。

思わず顎を引いた香恋は、ちよっとだけ戸惑ってその顔を見上げる。

凛々しい眉に鋭い目。角ばった輪郭と厚みのある唇。年の頃は二十代半ばくらいだろうか。王子とは対照的な、ひどく男らしい顔である。それが、今にも爆発寸前レベルに怒っているように見える。

「……おい、ふざけるなよ。クソガキ。誰がお前のケツを触ったって？」

「タカツカサ。彼女は僕のお客様だ、丁寧に扱うように」

前を行く白の王子が、振り返って言った。

「……承知しております」

その時のタカツカサの顔といったらなかった。苦虫を噛み潰したような表情、というのほまささにこの顔のことかもしれない。

ちよっと得意になった香恋だったが、すぐにギクツとして首をすくめた。タカツカサの肩越しに、車から降りてきた連中が数人、土手を駆け下りてくるのが見えたからだから——

「あっ、ガキがツーベンに拉致られてる！」

「やべえ、とつとと逃げるぞ」

ベントツの威力、マジすごい。

そもそもこんな山陰の田舎町では、ベントツなんてまず見ることがない。まさにドラマか漫画の世界の乗り物である。香恋にしたって、最初は驚いて死んだふりを決めこんだほどだ。

「お客様」

その時、全く心のこもっていない笑みを唇だけに浮かべて、タカツカサが香恋を見下

ろした。

「申し訳ございませんが、手を離していただけますか。私のスーツが汚れてしまいますので」

「……え？」

しまった。いつの間にか、この男のスーツにしがみついていたようだ。

「……す、すみませんでした」

「いいえ」

上辺だけの微笑を浮かべたまま、男は車の後部座席の扉を開けて、車内に香恋を投げ入れた。

比喩ではない。本当に物みたいに投げられた。シートの肘置きにぶつかった腰のあたりがゴキッと音を立てたほどである。

「い、いだった」

しかしそのおかげなのか、ようやく下肢にも力が入る。香恋はふかふかのシートに座り直し、やっと人心地を取り戻した。

「じゃあ、さっきの若者たちとは面識はないんだね」

「まあ、……基本、知らない人たちです」

助手席に座る白の王子の質問に、香恋は少し迷いながらそう答えた。

「顔だけは、街でちょいちょい見かける程度っていうか。今夜はナンパされた友達を助けに行つて、そしたら、……逆恨みされたっていうか」

「それは……とんでもなくされたものだね」

車数台で追いかけて回された拳句、なおも執拗に探し回されていたのだから、王子から戸惑った声が返るのも無理はない。しかしそのあたり、さすがに全てを詳しく説明するのは憚られた。

実は、こういつたことは今日が初めてではないのである。クラスメイトがトラブルに巻きこまれたら香恋が呼ばれ、相手方と話をつける——なんとなく、それが当たり前な感じになって、自分でも意図しないうちに、他校の不良連中に顔が売ってしまったのだ。香恋自身はヤンキーでも、夜遊び好きなギャルでもない。ちよつと腕つぶしが強いだけだ。それが原因で、昨年、ある事件を起こしてしまい、この田舎町ではすっかり有名になっただけで——

「病院とかは別にいいので、そのあたりで降ろしてください。あの、お礼は改めてつてことです」

なにしろ財布も携帯も、転倒したはずみで飛び散ってしまった。それに、置いてきたバイクも気になる。

「心配しなくても、夜間外来のある外科をタカツカサが押さえてくれているよ」
 少しだけこちらを振り返り、穏やかな口調で王子は言った。

「ついでに言えば、君の原付バイクや落とし物も、回収するよう手はずしているはずだ。
 後でタカツカサに連絡先を訊いて、引き取りにいきなさい」

「なんで、そこまで？ 香恋は本気で驚いていた。王子が社長で、車や身なりからも大層な金持ちだというのはわかったが、気まぐれにしても親切すぎる。」

「というより、そんな細やかなフォローを、この短時間で黒の爺じいがしてくれたというの、
 だろうか。」

「あの、……タカチカサさんが、そういった手配をしてくださったんですか」
 「タカチカサじゃなくて、タカツカサね」

くっくくと笑いながら、白の王子は視線を再び前に戻した。

そのタカツカサは運転中で、先ほどから二人の会話には一切入ってこない。

「彼は、僕の秘書だね」

「秘書、ですか」

「とても優秀な男で、僕はもう彼なしでは生きていけないんだ。僕は用事があるから先に降りるけど、後はタカツカサに任せておけばいいよ」

え、そんな、もうお別れなんですか。香恋が口を開こうとすると、車は市内の大きな

ホテルの前で停まった。

「じゃあね、お姫様。もう無茶な真似をしては駄目だよ」

最後にウインク。再びきゅん……となった香恋は、ここで肝心な情報を訊いていないことに気がついた。王子の名前、そして連絡先である。

「あ、あの！」

急いで車のウインドウを開けた香恋は、ホテルマンに付き添われてエントランスに消えようとしている王子の背中に呼びかけた。

「名前……名前を教えてください。もう一度会って、お礼がしたいんですけどー！」

足を止めて振り返った王子は、少し意外そうに瞬まばたきをした後、優しく微笑ほほえんだ。

「また会うのは難しいかもしれないね。それにお礼なんて必要ないよ。じゃあ、元気で」

「ちよつと、待つ」

香恋の声を遮おさるように、いきなりウインドウが閉まった。間髪かはついれず、車が勢いよく発進する。

「あうつ」と、ウインドウに額ひたいをぶつけた香恋は、むっとして運転席の男を睨にらんだ。

「ちよつと、まだ話の最中なんですけどー！」

「お客様は、常識が足りないのでしょうか」

はい？

「このような公おおこうの場で大声を出されますと、否応いやおうなしに周囲の注目を集めてしまいます。取引をさせていただいている相手の前で、うちの社長が思わぬ恥をかくことになりかねません」

何、その厭味いやみな口調は。確かに、言う通りなんだけどさ。

その時、携帯の着信音が車内に響いた。タカツカサがイヤフォンを取り上げ、耳につける。

「はい、タカツカサです。ああ、いつもお世話になっております。予約の件ですが、今から一時間後に、宮里外科みやざとの前にお願ひします。お客様は十代の女性で、お名前は——」

感情のない声が、香恋に投げかけられた。

「お客様、お名前は」

「え、し、白鳥……」

だいたいどこで名乗っても一度は聞き返され、そして失笑される名前。香恋はこの名前をつけた亡き母親を少しだけ恨みつつ赤らんだ。とはいえ、本音を言えばこの名前は結構好きだ。今に名前負けしないレディーになるぞという意気込みも湧いてくる。

「し、白鳥、香恋ですっ」

思い切って告げると、一瞬、不思議な沈黙があった。

よく聞こえなかったのか、あるいは本気にされなかったのかと思ひ、香恋はもう一度繰り返した。

「あの……白鳥香恋ですが」

はっと弾はじかれたように、タカツカサがイヤフォンに手を添える。

「え、ああ、——お待たせしました。お客様のお名前は白鳥香恋様。ご自宅まで送っていただけますでしょうか、よろしくお願ひします。では」

何？ 今までのこの名前では色んな反応を見てきたけど、こんなのは初めてだぞ。

しかしその疑念は、今の電話がタクシーの予約だとわかったとたんに吹き飛んだ。

「あの、そこまでしてもらおう意味がわからないんですけど。だいたい私、お金とか持つてないし」

「社長の気まぐれで車にお乗せしたのですから、最後まで送り届けるのは当然でございます」

「……」

香恋の声を遮おさるようにタカツカサは言った。

「生憎あいにく私も仕事がございますので、病院の前で失礼させていただきます。必要な手続きなどは全て済ませてございますので、受付ではこの名刺をお出しく下さい」

運転席から名刺を差し出されたので、香恋は仕方なくそれを受け取った。そして目を見開いた。

総合警備保障 株式会社ライフガードイアンズ（LGS）
東京本社 総務部秘書課 主任 鷹司脩二

「……ライフガードイアンズ……あの、もしかして、CMとかでよくやってるあの会社ですか！」

「ご存知でいらつしゃいますか」

「はい、はい。大ファンです。あ、会社じゃなくて、CMに出てる元柔道選手の」

「……小杉選手ですか」

「そうそう、絢ちゃん！」

香恋は目を輝かせて頷いた。

オリンピックで三回連続金メダルを取った小杉絢。通称、絢ちゃん。初めて金メダルを取ったのは、なんと高校一年生の時だ。その愛くるしい笑顔で一躍人気者になった彼女は、今から三年ほど前に現役を退き、タレントに転身した。

「もーっ、昔から大ファンなんですよ。絢ちゃんのことなら、大抵のことは知ってます」
ライフガードイアンズに関しては、何をしている会社なのかさっぱりわからないが。

「それに私、絢ちゃんに憧れて柔道を始めたんです。握手してもらったこともあるんで

す。すごい、すごい、あの絢ちゃんがCMに出てる会社なんて。これ、マジ運命じゃないですか！」

ここで香恋は、自分の封印していた過去を、無意識に口にしてしまったことに気がついた。

「——あ、まあ、柔道やってたっていつでも、ちょっとかじってたというか、たしなんでいた程度で」

「先ほどの方はライフガードイアンズの代表取締役社長で、創業一族直系の御曹司でございます」

香恋の話に興味がないのか、鷹司はあっさりと話題を変えた。

「ですから、お礼は結構ですし、もう二度とお会いする機会もございませんでしょう」
辛辣な言葉は、丁寧な口調で言われるとよりキツくなるものだと思えなかった。

そりゃ……そんな雲の上の人に普通に会えるとは思えないけど、でもでも、その人もしかしたら、私の運命の人かもしれないじゃない。

だって、白いベンツに乗って現れた。こじつけだけど、白馬の王子様みたいだった。

さらに言えば、憧れの小杉絢も絡んでいる。柔道を始めた時のように、これってもしかして、自分の人生の転機かもしれない。そう思った香恋は、衝動的に口を開いていた。

「どうしたらいいですか」

「はい？」

「たとえばですね。私が鷹司さんみたいにな、あの人の傍に——つまり、秘書になるためには、どうしたらいいですか！」

「……………はい？」

たつぷり一分ほど鷹司は黙っていた。香恋はドキドキしながら彼の言葉を待っていたが、やがて病院の看板が右斜め前方に見えてくる。

「お客様、病院に着きました。エントランスに車をつけますので、お忘れ物のないようご注意ください」

え、何、無視ですか。

そりゃあ、馬鹿なことを訊いてしまったとは思っているけど。

鷹司はきつちりエントランス中央に車を停めると、先に車を降り、優雅な動作で後部座席の扉を開けてくれた。

「……………ありがとうございます」

嫌な奴だけど、今夜、窮地を助けてもらったことだけは間違いない。ぺこり、と頭を下げて車を降りようとした時だった。

いきなり鷹司がドアに片手をかけ、香恋の前に立ち塞がった。

びっくりして見上げると、鋭く光る怖い目が、香恋を見下ろしている。

「お前、高校、何年生だ」

口調までもガラツと変わる。香恋はドキリとして、顎を引いた。

「さ、三年……………あつ、そういえば就活中です！」

そうだ。ライフガーディアンズに就職するという手があった。しかし鷹司は、いかにも馬鹿にしたように鼻先で笑った。

「もう来年の採用枠は埋まっている。というより、高卒は本社じゃ採らない。うちの会社に来たけりゃ、大学に行くんだな」

え、無理……………卒業すら危うい成績なのに、そんなの、逆立ちしたって無理に決まっている。

「逆立ちしても無理なら、バク転でもしたらどうだ」

「はっ？」

何、この人。さっきから、私の内心ズバズバズバズバ言い当ててない？

「仕事柄、人の気持ちを先読みするくせがあるんだよ」

鷹司は腕を組み、眉間にかすかな皺を寄せた。

「秘書の仕事を舐めるなよ。お前みたいな根性なしに務まるような甘い仕事じゃない。

二十四時間自分を殺してひたすら相手にサーブスしつつ、複数の頼まれ事を同時進行でさばっていくんだ。高度な事務処理能力はもちろん、コミュニケーション能力と忍耐力、

柔軟で迅速なトラブル処理能力が必要とされる。お前みたいな女には、まず無理だ」
 香恋はぐっと言葉に詰まる。そりゃ、今言われた能力なんて、ひとつも私にはないですけど。

「お、お前みたいな女になって、初対面のあなたに、私の何が」

「わかるね。ただ怠惰に日々を過ごしているだけの女子高生。短気で思慮が浅く、今の環境に漠然とした不満はあっても、それをなんとかしようという気はない。低いレベルに順応する力はあるみたいだがな。そんな奴には、夢も希望も未来もない。俺から見れば、最低の人種だ」

香恋は唾然としたまま、男の顔を見ていた。

そこまで、言う？——初対面の女子高生に、そこまで言う？

本当にこいつ、最低だ。今まで色んなことを色んな人に言われてきたけど、ここまで徹底的に全否定されたのは初めてだ。ドアから離れた鷹司に向かって、香恋は言った。

「行きますよ。大学」

そして車を降り、拳を握りしめる。

「行きますよ。そしておたくの会社に就職します。絶対に社長の秘書になります」

今度は、鷹司が呆れたような表情になる。

「ま、頑張るんだな。無駄な努力が好きならば」

「言っときますけど、努力は必ず報われるんです！」

そう口にしたとたん、香恋は自分の言葉に驚いて瞬きをした。その言葉はかつての香恋の座右の銘であり、そして自分で捨て去った言葉でもあったからだ。

努力は、報われない。それが一年前の理不尽な事件で、香恋が学んだ教訓である。

一瞬眉根を寄せた鷹司は、しかしすぐに冷笑を浮かべた。

「じゃあ俺も言わせてもらうが、その言葉を吐けるのは、人生の勝者だけだ」

「だ、だから、今はそうかもしれないけど」

「この世には報われない努力もある。もっともお前には、それを口にする資格すらないんじゃないか」

え、何。——どういう、こと？

「じゃあな。もう二度と会わないで済めばいいな。お互いに」

「あっ、あの、鷹司さん」

もしかして私のこと——知ってるんですか？

その時、昏い眼差しが香恋をとらえたような気がしたが、鷹司は何も言わずに車に乗りこんだ。駆け寄った香恋の目の前で扉が閉まる。

白いベンツが夜の闇に消えていく。香恋はしばらく身動きもできず、その場に立ち尽くしていた。

第一章 新入社員と鬼上司

「え？　じゃあ五月にもなつて、今日が初出勤つてこと？　しかも午後から？」
 携帯を耳と肩で挟んだまま、香恋はその言葉に頷いた。

「そう。とにかく最初の一ヶ月は研修はつかでさ。今日の午前中も説明会と社内見学で——あ、もうそろそろ電話切つてもいい？　昼休憩終わっちゃうから」

言葉を切つた香恋は、残りのサンドイッチを野菜ジュースで流しこんだ。

「しっかし、香恋がOLさんねえ」

電話の相手——親友の前田藍は、心底感心したような声で言った。その背後で「カツ井上がり」と威勢のいい声が聞こえるのは、実家の定食屋の手伝いをしているからだろう。

「あの香恋が大学に行ったことさえ天変地異の前触れかと思つたけど、まさかまさか、テレビでもおなじみの有名企業に本当に就職しちゃうとはね。世の中何が起こるかかわかないもんだ」

「まあ、なんつーの？」

「……運命！」

ロマンス小説が三度のご飯より好きな藍と、その影響を幼時から否応なしに受け続けてきた香恋は、そろつて黄色い歓声をあげた。

隣のベンチに座るサラリーマン風の男から、ちよつと迷惑げな目を向けられる。香恋は慌てて口を押さえ、ぺこりと小さく頭を下げた。

五月の陽光の下。川沿いにある小さな公園。可愛いベンチが点在し、背後のビル群が芝生に影を落としている。ここは、昼休憩ともなればオフィス街から流れてきたOLやビジネスマンたちの憩いの場となるようだ。入社式以来、ずっと外部の施設で研修を受けていた香恋にとって、こんな小洒落た場所でランチを取るの、今日が初めてのことだった。

「まあ、努力は報われるつてことだよね」

香恋は出来上がったばかりの名刺をポケットから取り出し、しみじみと呟いた。

総合警備保障 株式会社ライフガード・ディアンズ（LGS）

東京本社 総務部秘書課 第二係 白鳥香恋

この肩書を手に入れるために、これまでどれだけ血の涙を流したかは語るまい。

故郷の人たちからは、奇跡とまで言われた大学進学。浪人時代には体重が四十キロを切り、血尿が出て、十円ハゲが三つもできた。そして大学進学後も辛かった。生活費は自分で稼ぐという条件で県外の大学に行かせてもらったから、勉強の合間にバイトをし、バイトの合間に勉強をした。——まあ、語ってしまったが、それくらい苦勞したのである。

「香恋、でも気をつけて」

じゃあそろそろ——と香恋が言いかけた時、不意に電話の向こうの親友が言った。

「なんだろ、つまり、何もかもトントン拍子にいきすぎて、逆に少し怖いってこと。大合格までは確かに香恋の努力だけど、就職って個人の努力だけじゃ無理なところがあるじゃない」

「まあ、そうかもしれないけど」

「内定まではギリでありとしても、希望通り秘書課配属つてのが、どうもね。何か、見えない力が働いてるような気がして」

「……それって、五年前のこと？」

ちよつと声のトーンを下げて香恋は訊いた。五年前——白の王子と、黒の爺に助けてもらったあの夜の出来事。香恋の人生を変えるきっかけとなった、あの夜のことである。

「見えない力って、もしかしてその時の社長さんが私を秘書課に推薦してくれたとか？ だったら逆に嬉しいけど、その線は薄いと思うよ。……だって」

当時社長と呼ばれていた白の王子は、すでに、ライフガーディアンズにいないのだ。

白の王子——冷泉総一郎、三十六歳。LGSの創業者の玄孫で、ハーバード大学卒。三年前に代表取締役を辞し、現在は関連企業の最高顧問職に就いている。父親はLGSの元会長、母親は国内最大手自動車メーカー会長の娘で、どちらも他界しているようだ。正直言えば、そんな経歴なんて知らなきゃよかったと香恋は思った。

まさに、雲の上の上の人。逆立ちどころかバク転したって無理である。何が——と問われれば、言葉を濁すしかないが、まあ、つまり恋的なものだ。あの夜、香恋は恋に落ちたつもりなのである。

「いや、その線もあるかもしれないけど、私が気になるのは白じゃなくて、黒の方だよ」

藍の言葉に、香恋はドキツとして眉を上げた。黒の方——鷹司脩二。

「そいつ、香恋のこと、昔から知ってた感じだったんでしょ」

「それは——あれだよ、私が勝手にそうかなって思っただけで」

言葉を切って、香恋は少しだけ憂鬱なため息を吐いた。

（この世には報われない努力もある。もっともお前には、それを口にする資格すらない

んじゃないか)

あの言葉は、五年経った今でも耳に残って離れない。認めたくないが凶星であり、当時の香恋にとっては、心がえぐられるような一言だった。

「ただ、その鷹司さんだって、今は本社にいないからさ」

「あれ、そうなの？」

「言わなかったっけ。三年前に海外に異動になってる。今も向こうにいると思うよ」

冷泉社長の辞任に合わせるように、彼もまた、三年前にロンドン支社に異動になっていたので。

それには正直、かなりほっとした香恋なのだった。冷泉元社長には会いたくても、あの男にはあまり会いたくない。

「そっか……。じゃあ、私の思い過ごしかな。もしかしてその鷹司って奴が、意図して香恋を秘書課に呼んだんじゃないかって思ったから」

「は？ 意図？ なんの？ あの人はあれ以来会ってないのに？」

「ま、なんにしても気をつけて。ロマンス小説だって、上手くいきすぎた後には、落とし穴が待ってるものだからね。とにかく鷹司には要注意、これは親友としての忠告だよ」

五月晴れの空の下、本社ビルが見えてくる頃には、香恋はすっかり親友の忠告を忘れていた。

株式会社ライフガーディアンズ——通称LGS。五年前には何をやっている会社かまるで関心のなかった香恋だが、もちろん今は知っている。東京赤坂に十一階建ての自社ビルを持ち、全国に三百近くの支社を持つ。資本金二百億円強の、国内最大の総合警備会社である。

個人、法人向けのセキュリティ商品の販売。警備輸送。警備員の派遣。そして建物の総合管理。業務内容は多岐にわたる。

今も本社ビルの巨大看板では、LGSの警備員服に身を包んだ小杉絢が微笑んでいる。〈あなたの人生をがっちり守る。総合警備保障ライフガーディアンズ〉

テレビで何度も耳にした宣伝文句。本当に夢みたいだ、その会社に自分が入社できるなんて。

高級ホテルのようなエントランスで警備員に社員証を見せて自動ドアをくぐると、そこには大理石のフロアが広がっていた。天井から吊り下げられているのは小杉絢の巨大看板である。

エレベーターで秘書課のある十階に降り立った香恋は、「おうっ」と外国人みたいな感嘆の声をあげた。すごい、ふかふかの絨毯が廊下にまで敷き詰めてある。

ここが選ばれた人間しか入れない特別な空間だと、改めて思い知らされた瞬間だった。そして自分は選ばれたのだ。それは——かなりすごいことではないだろうか。

高級感あふれる木製の扉を開けると、そこもまた想像以上に華麗な空間だった。

靴が埋まるほど毛足の長い絨毯じゅうたん。ずらっと並んだマホガニーのデスク。革張りのチェア。

なにより驚いたのは、そのデスクに座る女性たちの美しさだ。全員が目を見張るほどの美女である。髪の色も、メイクも完璧。花畑のような色とりどりのスーツ。

「あ、あの、はじめまして。わたくし、今日からこちらに配属されました、白鳥」

さすがに緊張した香恋が、そこまで言った時だった。すつと顔を上げた数人が、その視線を再び下げた。まるで「あら、関係ない人が来たわ」と言わんばかりに。

——え、何、このアウエー感。今日から私、皆さんの同僚になる……んですよね。

「あ……、苗字は白い鳥と書きまして、名前は、いつも名前負けしてるって言われるんですけど」

「サクマさん」

香恋の言葉を遮るしやんように、一番手前のデスクに座っている巻髪の女性が声をあげた。

ん、サクマ？

「あ、いえ、私はサクマではなく」

香恋がそう言うと、女はふいっと左の方に顔を向ける。

「ちょっと、サクマさん、この子早く連れてってよ。何か勘違いしてるみたいだから」

え、勘違いって？ え？

「サクマ係長なら今、外だ」

低い声が背後から割って入った。

香恋のすぐ後ろ、今、入ってきたばかりの扉の側——そこに立っていたのは、香恋を見下ろすほど背の高い男である。

「たか……」と言ったきり、香恋は言葉が出てこなくなった。

まさか、なんで……ロンドンに異動になったはずの人が、どうして、ここに。

ワックスで軽く流しただけの硬そうな髪、周囲を威圧するような鋭い眼差しまなざし。五年前と変わったのは、チタンフレームのシャープな眼鏡をかけていることだけ。

たったそれだけの変化が、鷹司脩二を五年前の何倍も知的に——そして冷淡に見せていた。

「課長、お戻りになられたんですか」

すかさず、先ほどの巻髪の女性が立ち上がった。首にかかった名札には、志田遥しだはるかと書かれている。声も態度もガラリと変わり、別人のように愛想がいい。

しかし、別人になったのは志田遥だけではなかった。

「お帰りなさい。課長」「今、お茶でもお淹れします！」

全員が、スイッチでも入ったかのように満面の笑みになったのは、何故……？

「いい。加納社長と一緒に、すぐ外に出ることになった。ヤナギ主任は？」

「あ、主任は今、第二の方に」

「じゃあすぐに呼んでくれ」

鷹司はそれだけ言うと、突っ立っている香恋の傍らをすり抜けた。

鷹司の大きな肩、広い背中、スーツに包まれた長い手足。香恋はまだ、言葉が何も出てこない。

「突っ立ってないで、さっさと挨拶にでも行ったら？」

志田遥が横目で香恋を見ながら、つつけんどんな声で言った。

「新任の課長の挨拶があるから十二時集合、って連絡あったでしょ。もう一時じゃない。

初日から何、遅刻してんのよ」

「え、聞いて、ない……って、新任の課長って？」

思わず聞き返した香恋に、遥はさも不機嫌そうな目を向けた。

「前の課長が昨日付で退職したの。てか、馴れ馴れしくタメ口なんてきかないでよ。第二のくせに」

「第二……？」

「あなた、——白鳥さん、こちらに来て。新任の課長を紹介します」

不意に、奥の方から凜とした美声が響いた。弾かれたように顔を上げた香恋の視界に、声の印象以上に綺麗な女性が現れた。

身長は百七十センチくらい。八頭身で顔が人形みたいに小さく、髪は後ろでひとつに束ねられている。

一体どこから現れたのだろうか。さっきまで、こんな人はいなかった。この人がいるだけで、言っては悪いが、他の女性たちが一気にかすんで見える。

一瞬ぼうつとした香恋だが、その人の背後に鷹司の姿を見つけて、たちまち顔が引きつった。室内最奥に置かれたデスクについた鷹司は、両肘をつけて指を組み合わせ、刺すような眼差しで香恋を見つめている。

「私はここで主任をしている柳です。よろしく、白鳥さん」

おずおずと歩み寄った香恋に、美しい人はそう言って微笑みかけた。彼女の名札には、柳香子と書かれている。すごい、声も顔も綺麗な上に、名前まで美しいなんて。

「こちらは鷹司脩二課長。数年前まで、本社の秘書課、企画部で活躍していました。その後、ロンドン支社の統括部長をなさっておいででしたが、急遽、本日付で本社の秘書課長に就任なさいました。企画部の戦略担当室長と兼務なので不在のことも多いと思

「お前、化粧は？」

いきなり鷹司が香恋に向かつて口を開いた。

え、——化粧？ 化粧って言った？

香恋は、戸惑いながら柳を見た。しかし柳は、どうぞ？ と言わんばかりの笑みを浮かべて鷹司の背後に退く。まさかと思うけど、二人で会話しろってことだろうか。

「化粧って……メイクの、ことですか」

質問の意味がわからなくて聞き返したのだが、鷹司は酷く冷淡に笑った。

「メイクか。おやじくさい言い方で悪かったな」

言うなり、鷹司は無造作に机を叩いた。その音は、静かな室内に思いの外大きく響く。「ここで仕事をする気なら、食事の後は口紅くらい塗り直せ。みつともない面で、間違っても客の前に顔を出すな！」

香恋は、驚きとも憤りともつかない感情のまま、ただ啞然と口を開けた。

何、それ。なんなの、それ。確かに浮かれて、メイク直しを忘れたことは認めるけど、それを男性が——上司が、皆の前で大声で言う？

「それから、遅刻だ」

たたみかけるように、鷹司は続けた。

「時間厳守はな、社会人として最低限のルールだ。いいか、連絡事項には必ず目を通せ。意識を常に周囲の状況に向けておけ」

それだけ言って席を立った鷹司は、突っ立っている香恋を無視して歩き出す。

香恋はとっさに、鷹司の背を追った。

「ちよっと待ってください。あのですね。——私、本当に聞いてないし、知らなかったんです」

新任の課長が来ることも、そのために十二時集合になったことも。

「知っていれば、遅刻なんて絶対にしません。それで叱られるのは、納得できません」

「なるほどな」

振り返った鷹司は、眼鏡越しの冷たい目で香恋を見下ろした。

「今の最低な受け答えだけで十分だ。もう用はない、とっとと自分の部署に戻れ」

は——？

「五年前、お前は社長秘書になりたいと言ったな？ あの時にも言ったが、今改めて言ってる。お前には無理だ」

それは、香恋を侮蔑するような冷ややかな口調だった。

「大恥をかく前に、さっさと荷物をまとめて田舎に帰るんだな。——挨拶は以上」

鷹司は柳主任を促すようにして、外に出て行った。

取り残された香恋の背後では、ひそひそと不穏な囁きが聞こえる。

「何、あの子、鷹司課長と知り合い？」

「社長秘書になりたいって……馬鹿なの？」

——最低だ。……何、余計なことを暴露してくれたんだろう。

あいつは悪魔だ。五年前はモヤモヤとした疑念だけだったけど、今ならはっきり言える。どんな理由からかは知らないけど、あの男は私を、心の底から嫌っているのだ。

「やあやあ、すみません、すみません、遅くなりまして」

その時、間の抜けた声が、その場に響いた。

振り返った香恋の前に、ひどく猫背の初老の男が立っていた。目も眉も細く、髪は白髪交じりの短髪。よれよれのシャツにねじれたネクタイ。言っては悪いが、見るから

に貧相な男である。

首にぶら下がった名札には、佐隈信、と書かれている。——わかった。この人がサクマさんだ。

「新人さん、来ましたか。挨拶はもう？　そうですか。はいはい、じゃ、行こうか白鳥さん」

瘦せぎすで丸まった背中が、すたすたと左の壁に向かって歩き出す。いや、よく見ればそれは壁ではなく、壁と同色のパーティションだ。——そこに、小さな扉がある。

佐隈の枯れ枝みたいな指が、ノブを掴んで扉を開けた。

「はい、ここが君の職場ね。秘書課第二係、通称第二」

目の前に広がっているのは、先ほどまでいた部屋の七分の一程度の広さの空間だった。床は灰色のリノリウム。どうやら絨毯は、きつちり扉のところで途切れているようだ。

室内には、なんの変哲もない事務用デスクが三つ。そのひとつに目を向けた香恋は、ぎよっとして足を止めた。長い黒髪がデスク一面に広がっている。まるで、昔見たホラー映画のようだ。テレビの中から髪を垂らした女の人が這いずり出てくる、あの感じ——

その黒髪デスクの背後を、佐隈はスタスタと通り過ぎた。

「彼女、フジコさんね。不二子ちゃんじゃないよ。漫画家の方。苗字だからね。ベテランなんで、経理のことは彼女に教えてもらってください——藤子さん、昼休憩とつくに終わってるよ」

爆睡しているらしい藤子さんは、それでも目を覚まさない。仕方なく香恋は頭だけを下げ、そして慌てて、佐隈を追った。

「ちよ、どういことなんですか」

「どういこととは？」

ようやく佐隈が足を止めて振り返る。真面目なんだか笑っているんだかわからない佐隈の顔に、香恋は一瞬、どうリアクションしていないかわからなくなる。

「だって——おかしいじゃないですか。同じ秘書課なのに、違いすぎるっていうか。差がありすぎるっていうか。つまり向こうはセレブで、こっちは貧乏ですか?」

「普通だよ」

佐隈はちよつと目を丸くして香恋を見た。

「ここが、ごく普通の職場で、あちらさんが豪勢なだけ。第一が表で第二が裏つてだけの話」

「裏……?」

うんうんと頷いて、佐隈は係長席にちよこんと座った。

「第一さんが、重役連中のお守りを表立つてする立場なら、第二はそのサポート役。会場や車を手配したり、経費のチェックをしたり、給与や手当てなんかの庶務的な作業をしたり……」

少しの間天井を見上げた佐隈は、これ以上考えるのを放棄するみたいにパソコンを開いた。

「まあ、つまるところ、同じ秘書課でも、第一と第二はやるのがまるで違うってこと。あと基本、第二は第一の部屋に入れないから、そこそこ間違えないようにね」

「は? 入れない?」

「第一には、役員や来客が頻繁ひんぱんに出入りするんだよ。第一の奥に役員専用のフロアがあつて、来客なんかは、必ず第一を通過するようになってるからね」

香恋はポカンと口を開けた。

「つまり、……第二の私がいれば、来客対応の邪魔になると……」

「邪魔っていうか、ズバリ、目障りめざわり。秘書課の品格の問題ね。もう知つてると思うけど、うちの会社に取締役は七人いて、その半分くらいが創業一族の親族なの。つまり、超セレブ。で、セレブの客もまたセレブ。もつとはつきり言えば、貧乏人は第一にお呼びじゃないって話」

香恋は開いた口を閉じることも忘れていた。嘘でしょ。同じ職場で、そんな格差、アリ?

ちよつと……この待遇といい、先ほどの新任課長鷹司の、人を人とも思わない態度と
いい……

親友である藍の予感、見事に当たりだ。ここは最悪の職場だった。

「それにしても、さっきは残念だったね」

鼻歌まじりに、佐隈はパソコンのキーボードを叩き始めた。

「さっき、と言いますと」

「ん？ 鷹司君、あ、クンじゃないか、鷹司課長」

慰めてくれるのかと思つた香恋は、つい身を乗り出してた。

「そうですね。酷すぎですよ。私、本当に時間変更のことなんか聞いてないんですよ」

「そりやそうだ、僕が伝え忘れたんだから」

へ……………？ あ……………、なんですよ？

「ああいう時にどう切り返すかで、君の印象も随分違つただけどねえ。上司の言葉を別の言葉で言い直したり、頭から反論したりするのはまずいよ。せつかく柳主任にアピールするいいチャンスだったのに」

思わぬ言葉に、香恋は眉を寄せた。

「……………どういう意味ですか」

「どうもこうも、君、秘書希望なんですよ？ もちろん第二も秘書課には違いないんだけど、いわゆる秘書的業務は第一の仕事で、第二に秘書はいないからね。で、第二から第一に上がるには、柳主任の推薦がないと絶対に無理なんだよ。これは昔からの秘書課の伝統っていうか掟みたいなものなんだけど、現場秘書のトップは主任で、主任の采配には、課長も口を出せないからね」

そうだったんだ——あの美しくて優しそうな人が……………鷹司よりもある意味、上？

「で、その柳主任は君の目指す社長秘書で、超多忙だからね。君が主任にアピールする機会つてそんなにはないわけだ。これからは少しのチャンスにも目を光らせてないと、君、永久に第二だよ」

それだけ言うと、佐隈は、再び鼻歌まじりにパソコンのキーボードを叩き始めた。



「で？ 結局最初の挨拶は、鷹司つて奴があえて香恋にくれたチャンスだったつてことっ？」

「まあ、そうだったのかもしれないけど——」

二週間ぶりに郷里の親友、前田藍とスカイプで会話をしていた香恋は、ふうーっと大きなため息を吐いた。

会社からほど近い1Kの独身寮。築三十年以上のオンボロで、やたら門限に厳しいこの独身寮を利用しているのは、同期の女子の中では香恋一人らしい。

「いや、やっぱり違うと思う！」

その後の仕打ち——秘書課第二係に配属されてから今日までの二週間を振り返り、香恋はきっぱりと言つて拳を握りしめた。

佐隈があんなことを言ったから、「チャンスをくれたの?」と少しだけ思ったものもつかの間、鷹司はやっぱり最悪だった。柳主任がいるいないにかかわらず、些細な事で香恋を呼び止めては、説教、厭味、説教、厭味。そして怒涛の雑用投下。重箱の隅をつつくようなミスの指摘……

説教の最後は、必ず「辞表ならいつでも受け取るぞ」とか「いつ実家に帰るんだ? 繁忙期は特急料金が二百円増しだから、早く決断したほうがいいんじゃないか?」といった強烈な皮肉で締めくくる。

「やっぱりこれって、イジメ? 復讐? 私、知らないうちにあいつの恨みを買っちゃってる?」

「まあ、話聞か限り、イジメとは少し意味合いが違う気もするけどなあ」

案外冷静な藍はそう言って、ちよっとだけ考えるように間をあけた。

「なんだったら、そっちに行こうか。私」

「それはいい」

香恋は即答で断った。藍が出てくると、色んな意味で大変なことになる。

「まあ、いいや。私が乗りこむのは最後の手段として。それで同じ係の人たちはどうなわけ? ちゃんと香恋の味方になってくれるの?」

「うん……まあ、二人ともいい人っちゃあ、いい人なただけど」

第二係は香恋を入れて三人しかない。係長の佐隈と、先輩社員の藤子さんと藤子華だ。

佐隈は第二係長歴十年。超マイペースの変わり者で、味方でもなければ敵でもない。

香恋がちよっと引つかかっているのは、初日に髪を広げて爆睡していた藤子さんだ。

三十五歳。独身。ほわんとして案外可愛らしい人だが、どうも微妙に避けられているのかな、という気がする。無視されているわけではない。挨拶程度の会話もする。ただ仕事に関しては——無関心、というより思いつきで見ぬふりをされているようなのだ。

「まあ、佐隈係長と藤子さんは経理担当で、私とはやることが違うから。その点ではあまり頼りにはならないんだよね。だから味方っていうのも、ちよっと」

「ん? じゃあ、香恋は一体何やってんの?」

「私の仕事は、その他全般。雑用係ってとこなのかな」

香恋は、再び天井に向かって嘆息した。

「お茶出し、会議室の手配、片付け、コピー……まあ、なんでも屋みたいな感じだね。第一係のお手伝いみたいな。少しでも手が空いたら、鷹司からすぐに仕事が降ってくるし」

「どんな仕事而降ってくるの?」

「もう思いつく限りなんでもって感じ? 荷物のお届け、手紙の代筆、出てもない会議

の報告書の作成、英文レターの翻訳——できるわけがないよね？ とにかく、それを超早口で一気に言われるの。ちよつとでもメモを取り忘れたらたちまち雷。鬼よ、鬼、あの男は鬼なのよ！」

しまった。また感情的になってしまった。香恋はごほん、と咳払いをした。

「まあ、色々言ったけど、とりあえず私は大丈夫。とにかくそいつ——鷹司のことを思い出すとね。なんだろ。もう、腹の底からフツフツと？ やる気が湧いてくるのよ」

どんな厭味にも、酷い扱いにも、絶対に音を上げたくない。

とりあえず社長秘書の夢は置いておくとして、あの男——鷹司脩二に、たった一言でいい、「よくやった」と言わせたい。

「そうだ、それにすっごい素敵な人がいるんだよね。柳主任って言って、社長秘書。女の人なんだけど、もう超素敵、超かっこいいの——」

「……ああ、香恋は基本、すぐ誰かに憧れるからね……」

今度は藍がため息を吐いた。

「まあ、仕事のことは心配してないよ。なにしろ香恋は、うちの父ちゃんお墨付きの働き者だから。高校の時だって、うちの店で売り子やったり、原チャの免許取って出前行ってくれたり」

「そりゃ藍のおっちゃんにはお世話になったからさ。子供の頃からご飯食べさせても

らったし」

それに、あの事件ではすごい迷惑をかけてしまった——蒸し返すと藍が怒るから言わないけど。

「問題は、目先のことに夢中になるあまり、すぐに本質を見失うってことだよ。柔道だって最初は小杉絢のおっかけだったのが、頭数合わせで試合に出されて、あれよあれよと代表選手に」

「そりゃ、絢ちゃんみたいになりたいと思ったからだよ！」

女子柔道界に燦然と輝くひとつ星、小杉絢。香恋は子供みたいに目を輝かせた。

女子高生が金メダルをゲットしたことで、日本国中がにわか柔道ブームに沸いたあの頃——香恋はまだ小学校に上がる前だった。以来、小杉絢はずっと香恋の憧れの人だったのである。

「握手してもらった時のことは、今でもはっきり覚えてるよ。その頃、私は中学生で——絢ちゃん、色々バッシングとかあったけど、翌年のオリンピックで三度目の金メダルを取ったんだよね」

当時の小杉絢はオリンピック出場が危ぶまれるほど成績が悪く、その上恋人との手つなぎデートが写真誌に掲載されたため、マスコミから手のひらを返されたように叩かれていたのだ。

「いや、だから今はそういう話をしてるんじゃない……あ、ごめん香恋、ちょっと待ってくれる？」

多分店の手伝いだろう。藍が画面から消えたので、香恋は所在なく仰向けになった。

藍と香恋は幼稚園の時から幼馴染で、小中高と全て同じクラス。共に父子家庭で父親同士の間も良かったため、幼い頃から姉妹同然に暮らしてきた。

柔道一筋、町の猛犬と呼ばれた香恋と、ロマンス小説の熱心な愛読者で、誰もが振り返るほどの美少女の藍。対照的な外見を持つ二人は、力関係でいえば香恋の方が下だった。

藍はとにかく、外見に反して勇ましいのだ。小さい頃から彼女の父親が営む肉体労働者向けの定食屋を手伝っていたせいとか、いざという時の男らしさは半端ない。もしかして中身はおっさん？ と思うことさえある。おせっかい度も半端なく、恋愛事と見れば目の色を変えて介入してくる。ちなみに、藍が介入してきた恋愛は上手くいった試しがない。

「香恋、お待たせ。あれ、香恋？」

親友を待つ間に、香恋はいつしか眠りに落ちていた。

ああ、明日も頑張らなくちゃ。早くあの鬼上司を見返して、よくやったって言わせるんだもん。それまで、絶対、辞めたりなんかしない……



「模様」

新聞から顔も上げずに鷹司は言った。

朝。秘書課第一係。課長席に湯呑みを置いて立ち去ろうとした香恋は、足を止めて首をかしげた。

「模様といったら湯呑みの模様。お前の耳は飾りか？」

しまった。お茶の温度から出し方、手の添え方まで完璧だったのに、また、そこを忘れていた。

「う、……申し訳ありません」

香恋は作法通り頭を下げ、湯呑みに手を添えて向きを変えた。模様がお客様の前になるように——相手はお客様ではなく、課長なのだけど。

新聞をデスクに置いた鷹司がようやく顔を上げる。チャンフレームの下の冷たい目は、今朝は一段と不機嫌そうだ。

「不思議なものだよな」

湯呑みを長い指で掴み、唇に軽くつけてから鷹司は言った。

「お茶なんて茶葉に湯を注ぐだけだろ。誰が淹れても同じ味のはずなのに、どうしてなんだろうな」

「どうして……と、おっしゃいますと」

「ただの煎茶も淹れ方によっては玉露のようになるし、最高の玉露も淹れ方によっては出がらしになる。これは本当にいい見本だよ」

——言いたいことがあるなら、はっきり言ってくださいよ！

香恋は心の声をぐっと呑みこんだ。これも朝の恒例行事。どうせ何を出したって、鷹司が厭味以外の言葉を口にすることはないのだ。

「それからついでに言うけどな。昨日回ってきた今月の業務報告書。あれ、日本語じゃないよな」

「……は？ どういう意味ですか、それ」

思わず反論めいた言葉が漏れた。首をかしげた鷹司がおもむろに口を開く。

「申し訳ございません。仰っておられる意味が、私の頭ではわかりかねるのですが。——はい」

背中隠した両拳を握りしめ、香恋は引きつった笑顔で鷹司の言葉を復唱した。くっそお……本当に覚えてろよ、この男。

「業務報告書のお前のレポート。日本人の俺に読めなかったから、てっきり日本語じゃ

ないと思ったんだが？ なあ、あれは一体何語だったんだ？」

課長席の前に立つ香恋の背後からは、秘書たちの抑えた笑い声が聞こえてくる。

もう駄目。もう限界。毎度のことながら、このあたりが限界だ。香恋は顔を上げていた。

「鷹司課長。お言葉を返してよろしいのなら、私は日本語以外の言語を知りません」

「堂々と言うな。バーカ。ここにいる全員が、少なくとも英検一級は持つてんだよ」

だん、と鷹司の手がデスクを叩いた。ひっと香恋は首をすくめる。

「お前、当然英会話くらい勉強してるんだろうな」

「き……基礎英語Ⅱくらいは」

「はあ？ 中学生か。それで社長秘書になりたいなんてよく言えたもんだ。いいか、時代は今」

「いつ、今は時間もお金もないんです。もうちょっと余裕ができれば、英語くらい習いにいきますよ」

長い説教の前触れを予感し、香恋はとっさに反論した。鷹司がむっと眉を寄せる。

「給料、ちゃんともらってるよな。多少高く思えても、自己投資はビジネスマンの基本だぞ」

わかってます。わかってますけど——色々、言いたくない事情もあるんですよ。

立ち読みサンプル はここまで